
シンポジウム 7

維新企画 7 : 腎不全・透析・腎移植の新しい治療法

座 長 今 村 亮 一 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 泌尿器科学分野)
荒 木 元 朗 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科腎泌尿器科学分野)

司会のことば

わが国は超高齢社会を迎え、年齢とともに増加するといわれている慢性腎臓病 (CKD) および末期腎不全の人口当たりの罹患率は上昇傾向が続いている。CKD 診療ガイド 2024 によると、わが国の CKD 患者数は現在約 2,000 万人と推計されている。これは実に成人の 5 人に 1 人が CKD 患者という事になる。CKD は前述のような末期腎不全のリスク因子であるだけでなく、心血管死、全死亡のリスク因子であることが知られており、現在 CKD の発症および進展を抑制するため、生活習慣病の改善や新規薬剤の試用等が試みられている。

ただ残念ながら、一部の患者は末期腎不全に至り、腎代替療法の実施が余儀なくされる。その多くは透析療法を受けられている。現在本治療の総患者数は減少傾向と

いわれながらも、全国で 34 万人以上の方が維持透析治療を受けられており、その多くが血液透析である (血液透析 96.9%, 腹膜透析 (ハイブリッドを含む) 3.1%, 2023 年末現在)。また腎移植患者数も新型コロナウイルス感染症の蔓延にて一時患者数が減少したものの、再び増加に転じており、2023 年では年間手術件数は 2,001 件であった。

わが国において CKD はもはや国民病であり、腎代替療法を必要とする末期腎不全患者は今後暫く大きく減少するとは考え難い。腎代替療法を必要とする患者の生命予後がより良好となるように、様々な工夫や新規治療を考えていく必要があることは言うまでもない。本シンポジウムでは、腎不全治療の現状、腎代替療法における様々な取り組みと将来像につき、5 人の演者から講演いただき活発な議論が行われた。